「海―自然と文化」東海大学紀要海洋学部　第２巻第２号　63-75頁（2004）
Journal of The School of Marine Science and Technology, Vol.2 No.2 pp. 63-75, 2004

教育旅行誘致の意義とその方策に関する一考察*1
静清教育旅行誘致協議会の事例研究を通して

新田時也*2

A Study of the Ends and Means of Project for Attracting Educational Tourism
A Case Study of the Sei-Sei Educational Travel Attraction Conference

Tokiya NITTA

Abstract

As society ages, we fear that the Japanese economy will continue to decline. Likewise, there will be a decrease in the working population of this country. Thus, a tourism development project has been established by some local residents in an effort to revitalize the local economy.

In this paper, as one of the projects to reinvigorate local economies, we analyze the ends and means of the project to try to attract educational tourism through a case study of the Sei-Sei Educational Travel Attraction Conference. In the results, the author recognizes that contact with the local cultures and traditions are the most important factors in this educational tourism development project.

１．本稿の目的

高齢社会の進展に伴い地域経済の低迷が危惧される現状において，地域の経済活性化を促進することを意図した観光振興が進められている．すなわち，観光振興による「地域の経済効果を整理すれば，所得創出効果，雇用創出効果，投資誘発効果，租税効果，さらに産業基盤整備効果，生活環境整備効果」（長谷，2003）が見込まれる．しかしながら，「観光振興のマイナス効果（影響）としては，自然環境の破壊，生活環境の悪化，観光資源の損傷および地域社会の変容」（前掲書）も懸念されるところである．

このような現状の中，総合的な学習の時間（以下，総合学習）として，体験学習を取り入れた教育旅行（以下，体験教育旅行）が，各地の小・中学校で実施されている．「小学校学習指導要領（平成10年12月告示，15年12月一部改正）」（以下，指導要領）によれば，総合学習とは，「(1) 自ら課題を見付け，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，よりよく問題を解決する資質や能力を育てること．(2) 学び方やものの考え方を身に付け，問題の解決や探究活動に主体的，創造的に取り組む態度を育て，自己の生き方を考えることができるようにすること．(3) 各教科，道徳及び特別活動で身に付けた知識や技能等を相互に関連付け，学習や生活において生かし，それらが総合的に働くようにすること」をねらいとして，小・中学校では平成14（2002）年度より，高等学校では平成15（2003）年度より学年進行で本格的に実施されている指導である．その一環としての体験学習は，「自然体験やボランティア活動などの社会体験，観察・実験，見学や調査，発表や討論，ものづくりや生産活動など体験的な学習，問題解決的な学習を積極的に取り入れること」（指導要領）を配慮するものであり，その指導のため，非日常の地域の文化に生徒を触れさせる教育旅行を，著者は，体験教育旅行と位置づける．

本稿では，観光振興の中でも，このような体験学習を通した教育旅行誘致の意義とその方策について，静清教育旅行誘致協議会（以下，協議会）の事業活動を事例研究することで考察する．

2004年９月13日受理

＊1　本稿は，平成16（2004）年８月24日に，東海大学海洋学部（静岡市）で開催された「第四回海と人間・研究フォーラム」のテーマ「駿河湾地域の自然・文化資源の発掘と創成」において，著者が講演した内容（「駿河湾地域の食文化の視点から」）を基に，加筆・修正したものである．なお，著者のこの講演は，中日新聞（平成16（2004）年８月25日付，朝刊，観光誘致に「食」活用を）に詳しく紹介されている．

＊2　東海大学海洋学部海洋文明学科（Department of Maritime Civilizations, School of Marine Science and Technology, Tokai University）

Fig. 1　The author took a photograph of Miho Training Institute on July 15, 2004.

Fig. 2　The author took a photograph of Mr. Humito Miyagishima on July 15, 2004 at Miho Training Institute.

2．協議会の事業活動

2-1　協議会発足の経緯

協議会の前身として，静清地区教育旅行を考える会（以下，考える会）が1995（平成７）年３月に発足した．発足の目的は，「静岡清水（以下，静清，著者注）地区に小学生，中学生を中心として高校生など修学旅行や体験旅行などの教育旅行を誘致すること」（資料：静清教育旅行誘致協議会の概要，以下，協議会の概要）であり，三保研修館（図１）内に事務局が置かれた[1]．

協議会の事務局長である宮城島史人氏（図２）に，発足当時の状況について，語っていただいた（2004（平成16）年７月15日，三保研修館内にて聞き取りを実施）．

当時の三保周辺の旅館・ホテルの供給サイドは，生徒対象の教育旅行よりも一般対象の観光旅行に比重を置いて営業を行っていた．と言うのも，前者の単価よりも，後者のそれのほうが高いからである．しかしながら，東海大学社会教育センター内の各博物館（現東海大学海洋科学博物館および東海大学自然史博物館）の入場者は，教育旅行の生徒が主流であり，そのため，学校側の需要サイドからは，生徒の宿泊場所の確保が求められていた．加えて，総合学習の取り入れに伴う学校教育の見直しで，総合学習としての体験学習の場を静清地域に，学校側は求めて来た．そこで，体験教育旅行の誘致を推し進めようとの意図から，考える会が発足した．その後，考える会は，その名称では教育旅行誘致をマイナス・イメージで捉えられやすいとの懸念から，1997（平成９）年に，現協議会名に改められ，今日に至っている．

2-2　体験学習を通した教育旅行誘致の取り組み

協議会として，最初の取り組みは，静清地域の体験教育

旅行を総合的に取り扱ったパンフレットの作成――1995（平成７）年，静岡市，清水市の教育旅行用の総合パンフレット作成（初版）（資料：協議会の概要）――であった．再び，宮城島氏からの聞き取りをもとにして，その取り組みの様子をまとめてみる．

最初のパンフレットは簡易なもので，理科および社会を主とした体験教育旅行プログラムを掲載した．協議会（2003）によれば（図３），そのプログラムも開発され，充実し，それは，「自然と環境」，「港の働き」，「海を知る」，「歴史を歩く」，「伝統工芸美術を学ぶ」および「文化と産業にふれる」の６項目から成り立っている[2]．

主に，パンフレットは，毎年，岐阜，東京，愛知，山梨

Fig. 3　The author took a photograph of a pamphlet on July 18, 2004 at the author's research room.

静岡・清水地区体験モニター旅行行程　平成16年8月3日(火)～4日(水)　1泊2日

1日目	JR静岡駅-------駿府匠宿-------南山荘(昼食)----登呂遺跡・博物館----日本平手揉み茶保存会(茶摘み体験)---- 10:15　10:45～11:30　12:00～13:00　13:20～14:00　14:30～15:00 静岡の文化・産業歴史を見学して頂きます。
	-----日本平ロープウェイ-------久能山東照宮----------(久能山下へ1159段の階段を徒歩で下山)-----いちご海岸通り(富久屋)----- 15:20～16:20　16:40 ＊久能山から下山は階段になりますので、歩きやすい靴でお願いします。
	-----羽衣の松(ビーチウォチング)-----東海大学社会教育センター(海洋科学博物館・夜の水族館)------宿舎へ 17:00～17:15　17:30～18:10　18:30 海洋科学博物館のプログラム夜の水族館で魚達の夜の生態を見学して頂きます。　宿舎は分宿になります。
2日目	宿舎------三保半島体験学習施設見学(海洋科学博物館・自然史博物館・海洋活動センターシーマック等)-----三保地区ホテル旅館見学------- 8:15　8:30～10:30 三保半島における海の体験を見学した後三保地区の宿舎を見学します．(三保園ホテル・旅館伯梁・湖畔・福田屋・松原荘・三保荘・竹下ナギサヤ・三保研修館)
	三保園ホテル(昼食と情報交換会)―-------清水ベイエリア見学(エスパルスドリームフェリー・ドリームプラザ・フェルケール博物館・マリンビル)-- 11:30～13:00　13:20～14:30 モニター参加者と各施設との情報交換
	清水魚市場・冷凍庫団地・コンテナターミナル(車中見学)------やすらぎの森(そば打ち体験)――――清水駅(解散) 15:30～16:30　17:30 清水港の働きを見学します。　笑味の家

＊コース内容は一部変更になる場合がございます。

Fig. 4　The author took a photograph of a schedule of a monitor travel.

Table 1 県別教育旅行団体数（2001，2002年度）
Number of educational tourist parties by the prefecture (2001, 2002)

団体 / 県名	幼稚園		小学校		中学校		高校		大学		専門学校		養護学校		養護施設		老人会		子供会		一般団体	
	2001年度	2002年度	2001	2002	2001	2002	2001	2002	2001	2002	2001	2002	2001	2002	2001	2002	2001	2002	2001	2002	2001	2002
北海道																						
青森県																						
岩手県																					1	
秋田県																						
山形県																						
宮城県																						
福島県							1															
新潟県																						
富山県																				1		
石川県																						
福井県																					1	
群馬県					1															1	6	4
栃木県							1										1					2
茨城県																						
埼玉県			5	3	3	2								1	1			2			8	4
千葉県			2	2											2		2		1		2	9
東京都			34	31	5	4	4	6	3	1		1	2		3	3	4	3	1	2	26	21
神奈川県	1	1	42	47	1	3		1						1	5	9	3	1	9	8	29	25
長野県	1	1	3	7			1		1				1			1		1		1	15	9
山梨県	4	4	12	15	2	1				1					4	8	2	1	1	3	11	5
静岡県	93	111	27	33	43	44	17	20	4	3		1	11	23	29	26	10	15	66	45	23	28
愛知県	1	1	4	5	2	1	1	1					2		4	1		1	3	4	31	21
岐阜県					3	3	1									1			1		5	5
滋賀県																		1		2	3	2
京都府						2							1		1						3	
大阪府					1																	
兵庫県						1											1		1			1
三重県																					3	2
和歌山県						1																
奈良県					1												1				1	
岡山県																						
広島県																						
山口県																						
鳥取県																						
島根県																						
香川県																						
愛媛県																						
徳島県																						
高知県																						
福岡県																					1	
佐賀県																						
長崎県																						
大分県																						
熊本県																					1	
宮崎県																						
鹿児島県									1													
沖縄県							1															
海外ツアー																						
合計	100	118	129	143	62	62	27	28	9	5	0	2	17	25	49	49	24	25	83	67	170	138

注1） 食事のみの団体が，63～66件．
注2） 団体利用契約および東海大学附属学校は除く．
出所） 協議会から入手した資料による．

および千葉の小・中学校に配布され，一泊二日ぐらいの短期宿泊圏から，二泊三日の長期宿泊圏へと，配布する圏域を拡げてきている．

パンフレットの配布だけでなく，1996（平成８）年からは，モニター旅行を企画している．当初は，３校４名の参加であったが，現在では，年数回のモニター旅行の企画に対し，多くの小・中学校が参加してきている．参考までに，最近のモニター旅行の日程表を掲載する[3]（図４）．

このようなパンフレットの配布やモニター旅行の企画の効果が上がって，表１に見られるような地域からの入込みが見られる．特に，神奈川県の小学校からの入込み学校数が多い．

中でも，横浜からの入込み学校数が多いのであるが，その理由について，宮城島氏は次のように語られた．

従来，横浜の小学校では，５年生が日光（栃木県）で行う体験教育旅行が主流であった．日光での体験学習は，歴史学習が主であった．そこで，協議会は横浜をターゲットとし，横浜の小学校の先生方をモニターとして静清地域に招待することで，静清地域では，歴史学習だけでなく，いろいろな体験学習が可能であることを，学校側に提示した．たとえば，お茶摘みとか港の見学などである．その結果，次第に，数校が主体的に，日程や目的地の選定にエージェントを通さず，静清地域で体験教育旅行を始めた．エージェントが困惑する中で，横浜の５年生が体験教育旅行として静清地域を訪れるようになると，続けて，同地域の６年生も修学旅行として来静清するようになった．中でも，お茶摘みや夜の水族館は好評であり，旅館宿泊部会校長会（横浜）でも，静清地域への体験教育旅行が話題にのぼりはじめ，横浜の小学校を異動した先生方も，異動先の小学校で静清地域の体験教育旅行の好さを語り，口コミで次第に広範囲に，静清地域の体験教育旅行が広まっていった．「だんだん一人歩きできたのかな」（宮城島氏）との感慨を持ち始めたそうである．その体験教育旅行の好さを物語る資料として，2003（平成15）年６月に静清地域を訪れて体験学習を行った横浜市立奈良小学校の５年生（当時）からの手紙（図５）を紹介する．

「地引きあみで引くのが重かったんですが，地引きあみはふつうにやれることじゃないから，とても良い体験ができました．」

「ぼくは夜の水族かんを見て，とてもびっくりしました．名前はわすれてしまったんですけど，マツみたいな魚はくちびるが光って，夜に漁をとるなんて，あたまがいいと思いました．」

「私は初めて飼育体験で，クラゲにえさをあげました．私は，アサリのからをわるのに，手を切りそうになったけど，一緒にやったらできました．そのときは，すごくうれしかったです．」

「一番たのしかったのは，みんなでねたことです．また，とまりにいきたいです．」

Fig. 5　The author took a photograph of some letters from some schoolchildren on July 25, 2004 at the author's research room.

2-3 実　績

奈良小学校からの手紙にもあるように，静清地域での体験学習のおもしろさが認知され，次第に需要が増えてきた．表２－１は，宿泊者の増加と，それに伴う一人当たり金額の増大を示している．一人当たり金額の増大の要因は，表２－２から，宿泊が占める割合の増加であることが伺える．

このような入込み学校数の増加による，経済効果の伸びは，行政を動かすことになっていく．この点について，続けて，宮城島氏からの聞き取りから考えていく．

協議会の事業は，静岡市観光課の認知も高まっている．協議会では，2003年度に，およそ２～３万部のパンフレット作成のため補助金を申請したが，その結果，費用の三分の一にあたるおよそ50万円の補助金が下りた．協議会の会員数も，順調に増加してきた．「われわれの予想以上に認知されてきたですね」（同）と嬉しそうに語られた．そして，学校側から体験学習の問い合わせが出てくると，行政も同時に誘致活動を行うようになった．協議会が学校側に信用を得るにも，行政が同時に誘致しているという事実は大きいものであり，それは協議会にとって，「われわれも望んでいたこと」（同）であった．行政が共に動き始めたことに対して，「行政がやることをわれわれがやっていただけ」（同）であり，「本当は行政に戻したいですよ」（同）と語られた．

Table 2-1　教育旅行団体数（三保地区，2000－2003年度）
Number of educational tourist parties (Miho, 2000－2003)

年度 / 形態		2000（平成12）年度				2001（平成13）年度				2002（平成14）年度				2003（平成15）年度			
		件数	人数	金　額	一人当たり金　額	件数	人数	金　額	一人当たり金　額	件数	人数	金　額	一人当たり金　額	件数	人数	金　額	一人当たり金　額
日帰あるいは宿泊		550	43,450	¥247,192,500	¥5,689.1	559	45,279	¥254,440,500	¥5,619.4	576	46,080	¥265,323,000	¥5,757.9	585	46,800	¥278,310,000	¥5,946.8
内訳	日　帰		26,115	¥39,172,500	¥1,500		27,515	¥41,272,500	¥1,500		27,394	¥41,091,000	¥1,500		26,980	¥40,470,000	¥1,500
	宿　泊		17,335	¥208,020,000	¥12,000		17,764	¥213,168,000	¥12,000		18,686	¥224,232,000	¥12,000		19,820	¥237,840,000	¥12,000

注）「宿泊」は，三保地区の数である．
出所）協議会から入手した資料を，著者が加工したものである．

Table 2-2　教育旅行団体 年度別形態別人数の割合（三保地区，2000－2003年度）
Rate of educational tourist parties that turned in forms (Miho, 2000－2003)

年度 / 形態		2000（平成12）年度	2001（平成13）年度	2002（平成14）年度	2003（平成15）年度
日帰あるいは宿泊		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
内訳	日　帰	60.1%	60.8%	59.4%	57.6%
	宿　泊	39.9%	39.2%	40.6%	42.4%

出所）Table 2-1 を，著者が更に加工したものである．

Fig. 6　The author took a photograph of a compact disc of a card model on July 18, 2004 at the author's research room.

また，協議会は，観光キャラバン[4]として，2003（平成15）年，静岡市観光課及び協会（静岡市観光協会，著者注）との共同誘致活動（学校訪問４回実施）（資料：協議会の概要）に加担した．それは，誘致のため訪問する学校を協議会が選定し，より信頼性のある市がそこへ宣伝活動に伺うものである．協議会が提供した映像を５分程度にまとめた名刺型のCD（図６）を作成して，それを市の職員が学校に持参するのであり，まさに，協議会と行政は「一心同体」（同）となっていった．

モニター旅行についても，県からという形で行政の協力が得られるようになった．

2003（平成15）年，県の「戦略的観光誘客事業」への参加（資料：協議会の概要）でエントリー・トップとなったことは，協議会の認知度を更に高めることになり，このような事業活動を通し，協議会は2004（平成16）年５月26日，静岡県観光協会から，第5回，しずおか観光大賞（体験学習賞）を受賞（資料：協議会の概要）する栄誉を得ることができたのである（図７）．

３．体験学習を通した教育旅行誘致の課題とその展望

協議会と行政との協力の下，静清地域の教育旅行誘致は発展しつつあるが，そこには，まだまだ，数多くの課題が残されている．宮城島氏は，次のように語られた．

課題の一として，体験教育旅行を希望する学校の需要が

Fig. 7　The author took a photograph of a shield on July 15, 2004 at Miho Training Institute.

高まる中で，体験学習プロジェクトの更なる拡充を努めたい．特に，海のプロジェクト――たとえば，カヌー体験とか――を増やしてほしいという学校が多い[5]．それに，由比や富士川地域でのプロジェクトの開発が遅れており，このあたりには薩埵峠ぐらいしか見当たらない[6]．

課題の二として，体験学習をした子供たちが，同じ体験学習を希望して家族で来静清した場合，それを，もう一度，家族で味わえるプロジェクトとして確立したいということである．というのも，現時点では，生徒が体験したプロジェクトは学校向けの提供であり，一般向けではない．そこで，現在，行政側では，一般体験プログラムの作成を静岡市経済政策課が中心となり開発し，すなわち，田植えや地曳き網体験を通して，一般の観光客を誘致する「体験型の都市，静岡市」（宮城島氏）への移行を目指している．その勉強会として，2004（平成16）年７月９日，静岡総合事務所にて，「静岡発！　体験型観光　第１回勉強会」が開催された．

最後に，体験教育旅行の展望であるが，「ただのレジャーだけじゃぁなくて，学習というものを，やっぱ，その中に絡めていきたいところがある」（同）と，三保に位置し，東海大学社会教育センターを有する本学に対しての期待を語られた．多くの小・中学校は，本学に寄せる信頼性から，本学に関係する施設での体験学習を希望しているとのことである[7]．

この点に関して，東海大学社会教育センターの学芸員で，学芸文化室学芸課の伊藤芳英氏（図８）から，聞き取りを行った（2004（平成16）年７月22日，メールにて聞き取りを実施）．

ミズウオ（*Alepisaurus ferox*）の解剖学習（図９）は，「科学技術振興事業団（現振興機構）の平成14年度地域科学館連携支援事業の助成をいただくことから始まった，小学校と当館（海洋科学博物館，著者注）との連携授業」（伊藤氏）であり，静岡市立清水興津小学校と東海大学付属小学校の２校が毎年，実施している．具体的な運営としては，約130人の生徒が５つの体験項目に分かれ，そのうちの31名の生徒が参加している．その５項目とは，「生物の生活と環境」，「海を調べる」，「海岸の漂着物調査」，「海の生きものをつくろう」および「海岸の姿」であり，生徒たちは，事前に自分のテーマを決めて博物館を訪れ，夏休みになると，更に個々の学習をすすめて，秋になるとそのまとめを行う．その後，発表の機会をもうけて，生徒同士が海についての情報の共有をする．

その目的は環境学習であり，静岡市立清水興津小学校とプログラム内容の検討を行っている．すなわち，ミズウオの胃から取り出された内容物の観察（図10）では，タバコの吸殻などが出てくるので，これは大きな環境学習となっている．しかしながら，受入れの体制や空間の確保など，体験学習で扱う素材も十分に揃わない現状である．「ミズウオは，容易に入手できるものではなく数に限りがあります．このミズウオが地元の海に漂着する物というところに環境学習と総合学習の意義があるので，参加者拡大を考えると壁となります．しかし，先生方からの評価は高く参加した人からは，是非来年も子供たちに見せてあげたいという声が耐えません」（同）．

Fig. 8　The author took a photograph of Mr.Yoshihide Ito who lectured about an environmental problem on July 22, 2004 at Miho Training Institute.

Fig. 9　The author took a photograph of some schoolchildren who observed a dissected mizuuo (*Alepisaurus ferox*) on July 22, 2004 at Miho Training Institute.

Fig. 10　The author took a photograph of some stomach contents of mizuuo (*Alepisaurus ferox*) on July 22, 2004 at Miho Training Institute.

今後の展望として，小学校と連携した体験学習プログラムを，社会教育機関の博物館機能に示される「普及」(同)に沿った重要な活動として行いたい．つまり，学校教育と社会教育の両面から，小学生の総合学習を組立てることが重要であり，「授業の一環として博物館を利用していただく場合，何より大切なことは，学校の先生との連携が重要です．先生とのコミュニケーションがとれないと，授業の中での達成目標も見えずに，何をしたら良いのかがわかり

ません」(同).「総合的な学習の時間（総合学習，著者注）が生徒主体となってテーマ探しから始まる学習なので，その内容に沿っていなければどんなに良いプログラムを準備しても，それは，押し付けにしかなりません」(同).

最後に，観光と体験学習の違いについて,「楽しい，めずらしい，おもしろいを前面に出した企画では，正に観光客誘致となります．ですから，学校との連携は，それとは異なります」(同)，と語られた.

4．考　察

観光とは，その地域に住まう人々の生活文化，つまり，衣，食，住に触れることであり，単なる娯楽を追いかけることだけが観光のコンセプトではない．そこには,「学ぶ」というコンセプトの必要性が，大いに認められる.

観光とは，訪れた地域の文化に「触れ」,「学ぶ」ことで，日常とは異なる非日常の新たな発見を体験する行動である．このことは，訪れた人々だけでなく，その地域に住まう人々にも,「多数の観光客を受け入れ，さまざまな賞賛や批判の声を聞くことによって初めて自分の地域のことがわかる．賞賛の声を聞けば，ほめられた部分についてますます磨きをかけようと考える．けなされた部分については，改善しなければと反省する」(岡本，2002）という経済効果以外の効果も考えられる.

このように，教育観光誘致の意義は，(1) 子供のうちから地域文化の魅力に触れさせることで，地域文化の知名度を高め，(2) ひいては，将来的にこの地に定住したいという希望者や訪れてみたいという観光客の増大が期待できるであろう．それは，(3) 地域経済の活性化，本学の立場から言えば，将来的な学生数の確保にもつながると考えられよう.

次に，その方策であるが，(1) 最も重要なコンセプトは，そこで何が得られたか，何を学ぶことができたのかであり，単なる，娯楽を求める「レジャー」ではないことは先に述べた．(2) そのために，本学部の果たすべき役割として，本学部は文系・理系を有する，いわば，総合学部であるので，その特質を活かした観光振興への協力体制の確立が，今後の課題である.「海洋学部が，いかに，この，大学がね，いかに絡んでいくのか」(宮城島氏）との問題提起にも見られるように，地域文化の見直しによる，新しい地域文化の創造と発信について．地域の大学を始めとした教育機関に課せられた役割とは何か．すなわち,「パートナーシップ型社会のなかで，産・官・民そして学が連携しながら観光振興を推進していくとき，それぞれの主体はどういう役割を果たすべきか」(井口，2002)．それは,「観光学も観光の実態に対する単なる現状批判でなく，将来展望をもって（地域）社会に有用でなければならない」(前掲書）ことであろう．そして，最後に，(3) 観光振興に外部資本が入ってきてしまうと，地域の文化を壊すことにもつながるので，その主体は，あくまでも地域の住民や地域の産業であり，行政や大学は，彼らの活動がスムーズに行えるようなサポートに徹して，三者が連携すべきであろう.

謝　辞

本稿をまとめるにあたり，取材にご協力をいただいた協議会の事務局長である宮城島史人氏，東海大学社会教育センターの学芸員で，学芸文化室学芸課の伊藤芳英氏，NPO 法人：三保の松原・羽衣村の理事で，羽衣ホテルの女将である遠藤まゆみ女史をはじめ，多くの団体および個人の方々に，厚く御礼申し上げます．また，貴重なコメントを御提示いただいたレフリーの方および御校閲の労をとられた本誌編集委員の方に，心からの感謝の意を表します.

注

1）　当時の会員は23団体であり，2004（平成16）年５月１日現在の会員一覧は，次の通りである.

会　　長：ホテル南山荘（米山唯司会長）
副 会 長：入船館
副 会 長：静岡市立登呂博物館
事 務 局：東海大学社会教育センター
監　　査：エスパルスドリームフェリー
幹　　事：日本平ロープウェイ
幹　　事：三保園ホテル
幹　　事：旅館　伯梁
会　　員：久能山東照宮
静岡市立芹沢銈介美術館
静岡手もみ茶保存会館
ステップインたまるや
駿府匠宿
富久屋（石垣いちご）
富士川楽座：富士川まちづくり株式会社
旅館　潮騒
松原荘ホテル
三保シーサイドホテル福田家
三保研修館
民宿　三保荘
民宿　竹下ナギサヤ
日本平パークセンター
エスパルスドリームプラザ
笑味の会
関係行政：静岡市経済部観光課
静岡市観光協会静岡支部
静岡市観光協会清水支部
静岡県観光協会

以上，順不同.
（資料：協議会会員名簿より作成）

なお，著者は今年度，協議会の無償の学識協力者として，正式に依頼されている（平成16（2004）年10月１日付).

2）　協議会（2003）によれば，⑴「自然と環境」では，「釣り（公認釣りインストラクター指導）」，「ビーチウォッチング」，「カヌー・段ボールカヌー・小石のアート」，「干物づくり」，「地曳き網」．⑵「港の働き」では，「マリンビル，コンテナターミナル」，「洋上清水港サバイバル調査」，「魚市場見学」，「浮上高速航行体験乗船ほか」，「由比港定置網見学ツアー」，「港を知る博物館」．⑶「海を知る」では，「東海大学社会教育センター」，「博物館体験学習プログラム」（「飼育体験」，「ウミホタル発光実験」，「海の水から塩をつくろう」，「化石のクリーニング」，「夜の水族館」，「水族館の裏側探検」，「水族館で海の探検」）．⑷「歴史を歩く」では，「由比本陣公園」，「弥生時代のくらし体験」，「久能山東照宮と博物館・修養体験」，「歴史を訪ねる（ハイキングコース）」．⑸「伝統工芸美術を学ぶ」では，「彩と模様の世界に遊ぶ」，「ロダンに親しむ」，「伝統工芸の創作体験」．⑹「文化と産業にふれる」では，「わさび漬辛み体験」，「やすらぎの森・清水森林公園」，「いちご狩り」，「茶摘み，手揉み茶製造」，「みかん狩り」，「エスパルスドリームプラザ・マジック体験」，「サッカーの地，清水」，「天女が舞い降りた伝説の浜辺」，「富士川楽座・クラフト体験」，「日本平から観る絶景」が，現在，プロジェクトとしてあげられている．

3）　これまでのモニター旅行の企画は，次の通り．
1997（平成９）年は，６校８名，
1998（平成10）年は，11校24名（年２回実施），
1999（平成11）年は，21校37名（年４回実施），
2000（平成12）年は，13校25名（年２回実施），
2001（平成13）年は，16校25名（年２回実施），
2002（平成14）年は，15校24名（年２回実施），
2003（平成15）年は，15校30名（年２回実施）．
（資料：協議会の概要）

2004（平成16）年のモニター旅行は，図４にも示したように，８月３日から８月４日までの一泊二日の日程で行われ，東京，神奈川および山梨の小学校の教員７名と共に，著者も参加した．その時の，日本平山頂における茶摘み体験の様子が，新聞記事に取り上げられている（８月４日付，静岡新聞朝刊，体験型旅行　静岡市へ）．著者は，その記事の中で，本県への教育誘致に関して，「今後は民間と大学などが連携を図り，情報発信できるかが検討課題」とコメントしている．

4）「静岡市への教育旅行が伸びている地域，又は資料請求等があり当市に興味を抱いている地域の小・中学校を訪問し，体験メニューを紹介した．今回は，体験プログラムを盛り込んだ名刺型CDを作成し，画像で紹介できる資料も提供」（資料：清水支部事業報告，以下，事業報告）．その配布先は，長野県松本市周辺（小学校９校他，2003/11/６～７），岐阜県大垣市周辺（中学校18校，2003/11/11～13），神奈川県横浜市（小学校10校，2003/11/18～19），千葉県市川市周辺（小学校15校他，2003/11/25～27），神奈川県横浜市（小学校20校，2003/12/２～４）および神奈川県横浜市（小学校10校，2003/12/11～12）である（資料：事業報告）．

5）　海洋の体験レジャーのひとつであるホエールウオッチングについて，野生イルカと人間の相互交流の研究で博士号を取得したマーク・オラムスは，「水中哺乳類（クジラ，イルカなど）を殺すことによって成り立っていた産業から，これらの動物を観察し，触れ合うことに基づく産業への転換は象徴的」（オラムス，2003）であり，「巨大にしてカリスマ的な野生動物のもたらす魅力の強烈さ，つまり，生きたまま自然の中にあることこそ魅力の源泉であることを示す」（前掲書）と述べている．現在，（本稿の）著者は，ウオッチングではなく食文化の視点から，イルカの文化的研究に取り掛かっている．

6）「うみ業研究会」（海を活用――たとえば，マリンスポーツ，フィッシング，観光漁業など――した地域活性化とその研究の活性化に寄与することを目的として，平成16（2004）年６月に発足，東京海洋大学が主）の一員であり，現在，由比港漁業協同組合と協力の下，サクラエビ（*Sergia lucens*）漁（図11）を観光資源として開発する仕事を手がけている著者は，由比ではブランドとしての水産物であるサクラエビを活用して，地域観光の需要の増大をはかることが必要でしょうとの提案を行ったところ，由比や富士川地域では「目立った体験がないもんですから，今，言った，由比の，そういう体験ですか，これは非常に目玉になる可能性は大だなと思うんですね」（宮城島氏），と賛同の意をいただいた．加えて，多くの小・中学校では，産業体験として冷凍庫体験を希望しているようであり，著者は，冷凍庫体験とサクラエビの試食体験を併せたプロジェクトの開発とその実現に向けて，由比港漁業協同組合と話し合っている最中である．

Fig. 11　The author took a photograph of sakuraebi (*Sergia lucens*) fishing on April 1, 2004 at off Miho.

また，宮城島氏は，「NPO法人：三保の松原・羽衣村」の理事長をも兼務されている．このNPO法人は，「私たちの郷土である三保の松原の風土の地理，地勢，歴史，文学，芸術，芸能，伝説，信仰，産業，環境問題を自らが学習し，これらの内容を，より多くの人たちに楽しく啓蒙するために企画・実践・提言する」（資料：三保の松原・羽衣村の趣意書，以下，趣意書）ことを目的に，当初，「三保の松原・羽衣村」として，1997（平成９）年10月，４名で設立された．その後，それは，

2003（平成15）年３月に解散され，同年同月，NPO法人として新たに設立された（資料：羽衣村の実績報告）．「ここに住み，学び，生活する人々に，三保と松原の風土の文化を理解してもらい自分の郷土に誇りと愛情そして責務を持つことのできる地域づくりと人づくりに貢献」（資料：趣意書）し，「訪れた旅人も魅力ある観光地として心を癒されるはず」（資料：趣意書）とのコンセプトのもと，2005（平成17）年のはじめを目処に，坐魚荘（図12）を拠点とした観光資源化――船から見る三保，羽衣伝説を語り部から聞く三保――を計画中である．

Fig. 12 An author's friend took a photograph of Zagyosou and the author on July 24, 2004 at Zagyosou.

なお，観光課（2004）によれば，「坐魚荘は，明治の元老・西園寺公望公が，大正８年（前年の1918（大正７）年，立憲政友会の総裁，原敬を首相とする内閣が成立，著者注），興津清見寺町に建てた別荘で，現在は明治村に移築され，国の登録文化財として公開」していたが，2004（平成16）年４月25日に，「静岡市は，この建物の歴史的経過を踏まえ，歴史的文化財として，もとあったこの地にできる限り忠実に復元」（前掲）した．場所は，JR興津駅からJR清水駅方面に，徒歩十数分．清見寺前．

7）　同じく，NPO法人：三保の松原・羽衣村の理事で，羽衣ホテルの女将である遠藤まゆみ女史（図13）から，三保における観光のありかたについて，聞き取り（2004（平成16）年３月17日，羽衣ホテルにて実施）を行った．

東海大学の創設者である松前重義博士は，「三保の風土の精神性」（遠藤女史）を学校設置の重要点におかれたのであろう．というのも，三保は「人間に与える精神文化の大きいところ」（同）だからである．だが，精神文化を象徴する「羽衣の松であり，薪能にしても」（同），その背後にある歴史や意味を理解せず，単に，見学だけでとどまっているようならば，すなわち，「側面だけ切り取ったようなやり方だと，なかなか，その，観光ってことで，人は育たない」（同）と語られている．遠藤女史の思いの背景には，近年における三保の景観の激変があり，「観光の娯楽的な側面からのみ名勝地を考えていたのでは，景観の背景にある文化を知る余裕も見識もなく，その名勝の価値すら深く考えず，浅はかに手を加えて景観の価値をわざわざ台無しにしてしまうことはあまりに多い」（資料：趣意書）ことへの警告であろう．

Fig. 13 The author took a photograph of Mrs. Mayumi Endo on March 17, 2004 at Hagoromo Hotel.

ここで，東海大学の松前達郎理事長・総長（当時，現在も同じ）は，本学設立の経緯について，次のように語られている．

「海洋学部は東海大学が清水市（2003（平成15）年４月１日から，旧静岡市と旧清水市は合併して，新生静岡市がスタートした，著者注）にもっていた水産研究所が基礎になっている．1947年，東海大学の前身である東海科学専門学校に産業科学研究所（現東海大学総合科学技術研究所）が設置された．これは地域の産業に役立つ研究を，といわば産学協同の一環として開設されたものであった．その一部門に水産研究部門があり，後に東海大学が東京・代々木に移転したあとも，地元水産・漁業界の要請で清水に残り，東海大学水産研究所としてユニークな活動を続けていた．とくに魚群探知機や海洋ファクシミリの開発は，その後のこの分野の研究に先鞭をつけるものであった．そうした水産研究所の実績の上に，海洋学部は開設され，それは地元からも大きな期待をもって迎えられた」（松前，1992）．

引用文献

長谷政弘（2003）: 新しい観光振興（長谷政弘編）．同文館，東京，289pp.
井口　貢（2002）: 観光文化の振興と地域社会（井口　貢編）．ミネルヴァ書房，京都，258pp.
松前達郎（1992）: 東海大学海洋学部三十年史（東海大学海洋学部三十年史編集委員会編）．東海大学海洋学部，静岡，386pp.
岡本伸之（2002）: 新たな観光まちづくりの挑戦（国土交通省総合政策局観光部監修，観光まちづくり研究会編）．ぎょうせい，東京，273pp.
オラムス，マーク（2003）: 海洋観光学入門（石井昭夫訳）．立教大学出版会，東京，200pp.
静清教育旅行誘致協議会（2003）: 体験教育旅行プログラム　静岡・清水（静清教育旅行誘致協議会編）．静岡，10pp.
静岡市経済部観光課（2004）: 西園寺公望公別邸　興津坐魚荘（静岡市経済部観光課編）．静岡，観光パンフレット，A4，１枚.

取材協力（団体）

羽衣ホテル，三保研修館，静清教育旅行誘致協議会，静岡市立清水興津小学校，東海大学社会教育センター，横浜市立奈良小学校　（敬称略）

取材協力（個人）

遠藤まゆみ，伊藤芳英，宮城島史人　（敬称略）

要　旨

高齢社会の進展は，わが国の経済低迷につながると懸念されており，つまり，労働人口の減少が原因とされる．そこで，いくつかの地域では，観光振興によって地域経済の活性化を図ろうとしている．

本稿では，地域経済の活性化策のひとつとして，体験学習を通した教育旅行誘致の意義とその方策を，静清教育旅行誘致協議会の事業活動の事例研究を通して分析する．結果として，教育旅行誘致の開発には，その地域の文化や伝統に触れることが最も重要な要因であると，著者は考える．